

人生ハンド仏句

第63号
H. 19. 6. 1
(毎月1日発行)

編集・発行
玉蓮山 真成 寺
編集部 谷川久仁子
TEL・FAX (0765)22-2268
メールアドレス
kokorochanthk@ybb.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/sinjoyujitoyama108/>



仏の眼

住職 谷川寛俊

「眼は心の窓」「眼は口ほどにも
のを言うと言われるほど、眼は
我々が生きて行く上で最も、重要
な役割をもっている器官です。

仏教では、人間の眼から仏の眼
までをそれぞれに、「肉眼」「凡夫
の目で、物の形を見るだけの眼。
「天眼」「普通の人には見えない
物まで見える眼。「慧眼」「更に進
んで、一切の人の迷いをよく見て、
なぜ迷いが起こるのかを、明らか
に知る事が出来る眼。「法眼」「一
切の人が皆、仏になれるというこ
ころまで、見透かす力がある眼。
「仏眼」「以上の四つの眼を遺憾
なくそなえた完全なる眼で、すべ
ての物を間違いない正しく見る力
のある眼と説き、更に法華経第十
九番目、法師功德品には、「法華経
を受持し、もしくは読み、もしくは
誦(じゆ)し、もしくは解説し、も

しくは書写せば、乃至(ないし)清浄な
る肉眼をもつて、すべての現象を見、
またその中の一切衆生を見、及び業
の因縁・果報の生処を悉(ことごと)く
知らん」と、法華経を信じれば肉眼
が、仏眼になると示されています。

次に、私達人間の目が仏眼になっ
たという仏教のお話をご紹介します。
お釈迦様が、説法してお歩きにな
っていた頃、盲目の老婆が訪ねて来
た時のお話です。

「私は二三年前に眼を煩(わづ)らい、
あの医者この医者、あの薬この薬と、
いろいろ治療をやってみましたが、
ついに治すことが出来ないで盲目に
なってしまうました。仕方がないの
で、神様に信心しましたが、一向に
効き目がありません。途方に暮れて
いたら村人達が噂をしています。

『お釈迦様と言う、この世に稀な偉
いお方が、この村の近くまで来てお
られる。その方は、人々に幸せにな
るお話をして下されるばかりではな
く、身体の病気も治して下さるほど
の偉い方だそうだ』と。

私はその噂を聞くと藁(わら)をも掴
む思いでお釈迦様の元へ行き、こう

告げました。「何とかして、私の眼が
見えるように治療していただきませ
ぬです。お願いします」と。

それを聞いたお釈迦様は、「よろし
い、私が治療してあげましょう。し
ばらく、ここに泊まりなさい。そし
て、治療には薬は不要、毎日、私の
話を聞いていればそれで宜しい。」と
老婆の悩みを受け入れられました。

老婆は大変喜び、こうして、お釈
迦様の説教を聴聞し、寝食を共にす
る日々が始まりました。

一日・二日・三日と過ぎて、老婆
は毎日毎日話を聞きながら、一体ど
のような治療をして下さるのだらう
か?と心待ちしておりました。そん
な日々も数日が経過して、お釈迦様
が、もうそろそろ良い頃だと見計ら
い、「お婆さん、どうかね、少しは見
えるようになりましたか?」と尋ね
られたのです。

すると老婆は、「はい。色々な心が
見えるようになりました」と。

「私は、眼が見えなくなつてからと
いうもの、ずっとこの眼のことばか
り考えて、夜も眠る事ができないく
らい悩んでおりました。そして、い

つ治療が始まるのかと・・・。し
かし、お釈迦様のお話を聞いてい
ると、眼に向いていた心が、耳の
方から、光が差し込んで来て、見
えない見えないとあせつていた心
が、次第に静まってきました。そ
の静まった心に耳から入ってきた
光が、あかあかと、私の心を照ら
しました。お話の光によって、自
分の心を眺める事が出来ました。
そして、心のうちを眺めてみれ
ば、なんと心の垢の多いこと、恨み
・憎しみ・妬み・疑い・高ぶり・
もう愛想がつかまりました。もう肉体
の眼は不要です。なまじ、人間の
眼が開かれれば、あれを見て腹を
立て、これを見て恨みをおこし、
心の負担が重くなって、耐えられ
ぬようになりましよう。もう、こ
のまま結構です。」

このように、肉眼が見えない老
婆は、お釈迦様に教えを受け、心
の眼をいただいたのでした。
私達もこのような心の眼を持ち
たいものであります。

